大学生参加型の「域学連携」まちづくり(1)

Student Community Development Activities by Community and University Collaboration (1)

舛井雄一
Yūichi MASUI

1．はじめに

現在安倍政権が「地方創生」を目玉にしている。それは地方創生を政権公約に掲げざるを得ないほど地方が厳しい状態にあることを示している。アベノミクスによって都市部の経済的な環境は良化しているという見方がある一方，その好影響がまだ地方にまでは届いていないといわれている[1]。実際，多くの地域では所得の伸び悩みのような経済的な問題があるだけでなく，人口減少や高齢化による担い手不足など深刻な問題と向き合わざるを得ない状態にある。そのような中で，政権が公約に掲げる以前から地域活性化の活動に対するニーズが全国的に高まっている。

一方で，大学を取り巻く環境についても大きな変化が起きている。18歳人口の減少は大学の生き残り競争に拍車をかけており，４年制大学の約半数である46％もの大学で入学者の定員割れを起こしている[2]。このような傾向は地方の大学で目立っているが，地方の大学では地域との結びつきを深めることに活路を見出そうとしている。地域の高校から入学者を増やすことができれば入学者の数が安定するだろう。またそういった学生が地域で就職すれば地域にとっても若年人口の流出という問題を緩和することができる。また，大学は企業などから社会で有用な人材を輩出していないという指摘もある[3]。そのような指摘に対し，大学ではPBLなどの手法を用いるケースが増えている。その実践の場として「地域」が選ばれている。

このように「地域」も「大学」も多くの課題を抱える中，両者の課題を解決するために手を取り合い始めている。そうすることによって，地域は大学から教育・研究の成果である「知」をはじめとする資源を利用することができる。一方，大学は地域から教育・研究の実践の場を与えてもらうことができる。お互いにとってメリットがあるそれらの活動は特に「域学連携」と呼ばれ，多くの大学や自治体に取り組み事例がみられる。

さて，このように大学と地域が連携して行う域学連携のまちづくりには様々なケースがあるが，本稿では筆者が所属している國學院大學北海道短期大学部，総合教養学科舛井ゼミで

行われている域学連携の地域活性化活動のケースを取り扱う。本学での取組はまだ始まったばかりであり未熟な取組ではあるが，地域活性化活動が始まった平成25年度から現在までの活動の内容を詳述し，その成果と課題を明らかにすることを本稿の目的とする。

そこで以下では２．で本学の地域活性活動の舞台となっている滝川市について商店街の現況と江部乙地域に分けて述べる。３．では舛井ゼミの活動について詳述する。そこでは，地域と連携したまちづくりに取り組むこととなった経緯，舛井ゼミの運営スタイル，商店街における活動として学生カフェaRisu，江部乙地域での活動として主に駅舎清掃について述べる。４．では現在明らかになっている活動の成果と課題について述べる。

２．滝川市の概要

滝川市は石狩平野の北部に位置しており，中空知地域の中心都市である。1890年に屯田兵440戸が入植し滝川村戸長役場が置かれたことからその歴史が始まり，1971年には滝川市と江部乙村が合併し，現在の形となった。市の南西から北西にかけて函館本線，市の南西から南東にかけて根室本線が走っている。また，道路は，市の南西から北西にかけて国道12号が走っており，札幌と旭川の中間地点に位置している。こうした交通の便をうけ，赤平や芦別など近隣の産炭地からの石炭をはじめとする物資の輸送など交通の要衝として栄えた。

人口は1983年の53,121人をピークに減少傾向にあり，現在約42,000人である（2014年11月現在)。中空知の総人口が112,730人であるから滝川市が中空知の中心都市であることが分かる。しかし，65歳以上の老年人口率が33％，０～14歳の年少人口率が10.6％であり，少子高齢化の問題を抱えている。また近年，郊外部での宅地開発や国道のバイパス化に伴う郊外型大型店の進出が相次ぎ，中心市街地の空洞化が発生している典型的な地方都市である。

産業としては，農業が盛んで作付面積比44％を占める米が中心であり，品質の良い米が多く取れる。菜種は全国でも一位を争うほど作付面積が大きい。また滝川市は味付けジンギスカン発祥の地として知られている。その他の特産品としては，かつて江部乙を中心としたりんご，たまねぎなども有名である。

2-1．滝川市の中心市街地の概要

滝川の中心市街地は市役所，市立病院，国や北海道の官公庁施設が立地し，またいくつかの商店街，飲食店街が形成されており，かつては市内外から多くの人が訪れ賑わいを見せていた。しかし，国道のバイパス化に伴う郊外型の大型店の進出の影響，駅前再開発ビルのキーテナントの撤退などの影響を受け，空き店舗が目立つシャッター街と化している。中心市街地の活性化の活動も行われてはいるもののなかなか成果にまで結びついていない[4]。

図１　滝川市の駅前商店街

図２　江部乙の丸加高原

2-2．江部乙の概要

江部乙は滝川市内にあるが，滝川市街からは北部に位置し，自然豊かな田園地帯である。江部乙地区の中央を国道12号線が走り，西側は主に水田地帯となっている一方，東側は小高い丘になっており自然体験などができる丸加高原やりんごを中心とした果樹園がある。江部乙は滝川の農業の中心地であるとともに非常に自然豊かな場所であり，非常に美しい農村景観と自然景観がある。

3．舛井ゼミの活動内容

3-1．地域活性化活動を始めた経緯

本学の総合教養学科では１年次，２年次ともにゼミが必修科目となっている。１年生のゼミでは基本的に「読む・書く・話す」をテーマに大学で勉学・研究するために必要とされる最低限の能力を身につけることを目的としている。２年生のゼミでは担当教員の専攻により，経済学・経営学，法学，英語学，言語学，哲学，情報処理などに分かれ，１年次のゼミと比べるとより専門的な教育を行っている。舛井ゼミでは基本的に上記のうち経済学・経営学分野を志望する学生及び，本学卒業後に就職を希望する学生を対象にしている。そうした学生を対象にテキストなどを通じて学んだ経済学・経営学の知識を本学の存立する滝川市を舞台とした地域活性化活動を通じて実践することを目的としている。しかし，最初から地域活性化の活動をしていた訳ではない。当初は筆者の専攻である会計学を学び，企業分析や業界分析などを行っていたが，筆者のゼミには本学を卒業後に四年制大学に編入する学生の割合が多く，その中には会計学だけでなく経営学や経済学など様々な分野を志望する学生も多

かったため，提供しているゼミの学習内容と学生のニーズがミスマッチしているという感触を持っていた。

そのような中，ゼミで地域活性化の活動をする契機となった出来事が 2 つある。ひとつは，平成24年度のゼミでSNS（ソーシャル・ネットワーキング・サービス）に関心を有するゼミ生のグループが「地域SNS」についての研究を行ったことである。「地域SNS」は主に市町村単位のローカルな地域内で様々なイベント情報，行政からの情報などをやり取りするためのSNSである。研究内容は滝川市内で地域SNSを実際に運用するとしたらどのような機能が求められるか，及び運用の課題は何かというものであった。その発表によってゼミ内で地域に対する意識が高まったことがゼミ活動として地域に目が向いた一つの契機であった。もう一つの契機は学生が実際にまちづくりイベントに参加したことである。筆者は市内のいくつかのまちづくり団体に所属しているのだが，その活動を通して地域から学生に活動に参加してほしいというニーズをずっと感じていた。そこで，市内で行われる冬のイベントである「紙袋ランターンフェスティバル」[5] において試験的に山形県出身の学生を中心に山形県のソウルフードである芋煮と玉こんにゃくを出店したところ，実行委員会から高い評価を頂いた。また参加した学生たちの満足度も非常に高かった。

提供しているゼミの学習内容と学生のニーズとのミスマッチという課題と地域活性化活動へ学生が参加することに対するニーズに応えるという課題の二つを同時に解決する手段として経済学・経営学の学習内容を地域活性化の活動に活かし実践することを考えた。また，地域活性化活動では学生が世代や価値観も異なるたくさんの地域の人と関わりながら進めていく必要がある。それによって学生が社会で求められる能力も高められるだろうと考えた。

上記のような契機で始まった地域活性化活動であるが，以下のような目的を達成することを目指している。

⑴ 実践的な経済学・経営学の教育方法の開発

地域活性化の活動を行うとはいえ，経済学・経営学を目指す学生たちのニーズに応えなくてはならない。従って，経済学・経営学分野の基礎的な座学による学習を応用できる実践的な教育方法を開発することは大きな目的となる。実践することによって座学だけでは学ぶことのできない応用力の養成，実践の過程で生じる様々な問題を解決する問題解決力の向上を図る。特に後者は通常の学生生活を送る中ではなかなか学ぶ機会は無く，実際に社会人となった際に大いに役立つと思われる。

⑵ 学生参加型地域活性化モデルの創出

地域活性化やまちづくりの活動には住民，行政，企業，NPOや各種団体のように様々なステークホルダーが参加しており，日本各地に成功事例もあるが，学生が参加することによってより効果が表れるようなモデルを構築したい。特に本学のような地方の小規模短大でも持続可能な「域学連携」のモデルを構築することが目的である。

⑶ 大学の地域貢献

近年では大学による地域貢献が一般的に求められるようになってきたが，それ以前から本学は中空知地域の五市五町から地域に貢献できる大学として期待されていた。その役割を果たすことによって本学が地域における地域活性化活動，まちづくり活動における重要なプレイヤーになれることを目指す。

3-2．平成25年度における活動

上記のような経緯からスタートした地域活性化活動であるが，平成25年度からゼミの正規の活動として取り組んだ。当該年度ではゼミのメンバーでいくつかのプロジェクトを結成した。全てのプロジェクトが地域活性化に取り組んだわけでは無かったが，市内の様々なイベントに出店しながら企画から販売までを実際に行う「マーケティングチーム」，サッカーを用いてテーマ型コミュニティを作り出す活動を行った「サッカーコミュニティ・チーム」，こうしたゼミの地域活性化活動や学内の様々なイベントを広報する「広報チーム」（以上２年ゼミ），更に一年生のゼミ生が「江部乙チーム」として主に地域活性化に取り組んだ。

⑴ マーケティングチーム

マーケティングチームは，自主的に参加した数名が市内の「菜の花祭り」に参加し「アスパラウインナー」を販売したメンバーを中心に結成された。アスパラウインナーは江部乙の農家で獲れたアスパラと隣町である新十津川町にある有名な燻製食品店のウインナーを串焼きにしたものである。菜の花祭りには多くの観光客が来たものの，販売の結果かなりの量が売れ残り損失を出してしまった。その原因としてマーケティング活動が不足していたことをあげたゼミ生が，マーケティングを学び，それを市内のイベントにおける出店で実践することを目的としたプロジェクトを立ち上げたのである。実践の場としては夏に行われた「太郎吉蔵ビアパーティー」（NPOアートチャレンジ滝川主催）と「軽トラ市」（有志団体の未来プロジェクト主催）にてプロジェクトメンバーが開発した「肉巻きおにぎり」を販売した。そこではイベントへの参加という地域ニーズに応えることができたこと，及びマーケティン

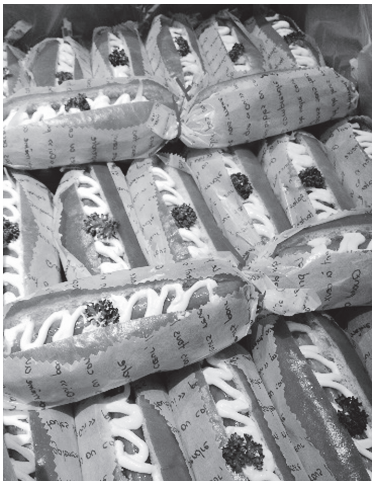

図３　マーケティングチーム開発のホワイトドッグ

図４　サッカーコミュニティ・チームのフットサル大会

グの知識も応用した結果として販売も好調だったという成果を得たものの，肉巻きおにぎりが地域活性化に資するものではないという新たな反省が生まれた。肉巻きおにぎりは滝川市の地域資源を活用したものではなかったからである。そこで市内のパン屋と「ホワイトドッグ」というホットドッグを共同開発した。このホワイトドッグは北海道産のハルユタカという小麦，滝川市の特産のひとつである「滝玉」という玉ねぎを材料に用いている。また，上に掛かっているソースは白い色をしたサワークリームであり，滝川の雪をイメージしたものになっている。平成25年度では共同開発したパン屋における販売イベント，ランターンフェスティバルでの販売を行った。

⑵　サッカーコミュニティ・チーム

サッカーコミュニティ・チームはゼミに所属するサッカー部のメンバーが中心となって形成されたプロジェクトである。調査から，滝川市内には小学生をはじめとした学校を中心とするサッカーチーム，社会人を中心とするサッカーチームなどプレイヤーが集まるコミュニティが豊富にあることが分かった。また，サッカーをプレイするのではなく観戦することを趣味とするコミュニティがあることも分かったが，それらのサッカー愛好家コミュニティ同士の交流がないことも判明した。そこで，これらの各コミュニティをつなげることにより，サッカーという共通項を通して市民の交流を深めることを目的に活動を行った。実践的な活動としては，市内のサッカー愛好家が集まるカフェで日本代表戦のパブリックビューイングの企画・運営，及び学内でフットサル大会「Kokutan cup」を開催した。このフットサル大

会では，小学生チーム，市役所チーム，市内の社会人チーム，サッカーをプレイすることが初めての専門学校生のチームなど多様なメンバーが集まる大会となったが，ルールを工夫し初心者から上級者までが楽しめる大会となった。また，このフットサル大会では前述したカフェで前夜祭も行った。前夜祭では翌日の大会に参加予定のメンバーがサッカーに関するクイズや学生が考案したゲームなどで楽しんだ。この一連のイベントによって今まで交流の機会があまりなかった局地的なサッカーコミュニティ同士が交流する良い機会を提供できたと評価している。

⑶ 広報チーム

広報チームは「短大と地域を繋ぐ」をコンセプトに，ゼミで行われる地域活性化活動に関するイベントを中心に学内の様々な情報を広報することを目的とするプロジェクトである。主なツールとしてFacebookページ「kjc広報部　國學院生短期大学生応援ページ」を立ち上げ，投稿規定を作成し，日常的な運営管理を行った。このkjc広報部　國學院生短期大学生応援ページは現在でも舛井ゼミの広報の中心的な存在である。また，市内の新聞販売店の協力を得て「國學院大學北海道短期大学部　國短情報発信隊」を発行し折込チラシとして市内の約半数の世帯に情報を提供した。これらの活動によって本学の地域活動が市内に知られ始めるようになったと評価している。

⑷ 江部乙チーム

一年生のゼミ生で構成された江部乙チームは，筆者も参加していた「江部乙まちづくり研究会」が江部乙駅舎を活用したまちづくり活動を行うことに伴い結成された。江部乙駅はかつてりんごを名産とした江部乙を象徴する場所の一つであった。特産品のりんごを行商の人たちが江部乙駅から汽車に乗って留萌や旭川などに売りに歩いた拠点であった。実際，江部乙駅の看板にはリンゴのモチーフが施されている。しかし，現在の江部乙駅前は当時の活気から比べると見る影もない状態であり，駅の利用者も少ない。そのような中で，かつてりんごという文化の発信拠点だった江部乙駅から江部乙のまちづくりを進めることとなった。

江部乙チームはまず駅舎の清掃から行うこととした。それは活動を始めるにあたり駅舎見学に行った際に駅舎が汚れていたこともあるが，何よりも清掃に地域の方々にも参加して頂き，そこでまちづくりに繋がっていくようなコミュニティを作りたいという思いがあったからである。毎月第二土曜日の13：30から駅舎の清掃をすることとしたが，幸いにも江部乙まちづくり研究会のメンバーの方々にも参加し続けてもらっている。また，江部乙チームのゼミ生は市の広報にも取り上げられ活動の認知度も向上した。

図５　広報チームのfacebookページ

図６　江部乙チームの駅舎清掃

駅舎清掃以外の活動としては，江部乙の近郊にある無人駅である納内駅と妹背牛駅に江部乙まちづくり研究会主催の視察会へ参加し，２月には江部乙駅舎で行われた江部乙駅ランターンというイベントでホットりんごというオリジナル飲料を販売した。こうした活動は短大と江部乙の地域住民とを繋ぐ役割を果たしていると評価している。

平成25年度には上記の４つのプロジェクトが地域活性化活動を行ったが，当該年度に行われた活動の成果としては，市内でまちづくり活動や地域活性化の活動を行っている市民，行政，諸団体との関係を築き始めるきっかけとなったことが最も大きい。facebookページ「kjc広報部　國學院生短期大学生応援ページ」や広報などで活動を目にしてくれた方々から様々なイベントや活動に声をかけてもらう機会が増えた。その縁から平成26年度の活動へと結びついているケースもある。このように縁を強化，広げていくことで本学が市内のまちづくりに関するネットワークのハブのような存在になりうる可能性もある。また，ゼミの活動として地域活性化の活動を行うことができるということを学生が示してくれたことも成果である。始まる前は心配な点なども多くあったが，実際には筆者の期待を超える活動を行ってくれたと感じている。実際，これらの活動のいくつかは平成26年度も継続している。マーケティングチームが共同開発したホワイトドッグは現在でも学生カフェaRisuなど各イベントで販売している。駅舎の清掃は現在でも毎月開催されている。さらに「kjc広報部　國學院生短期大学生応援ページ」は現在でも最も活用している広報ツールである。

3-3．舛井ゼミの運営スタイル

先述したように本学の総合教養学科では一年次に「読む・書く・話す」をコンセプトに基礎教育を行っている。二年次には各教員の専門分野に応じてより専門的な教育を行ってい

る。その基本は舛井ゼミでも同じであるが，舛井ゼミでは地域活性化活動を行うために特別な運営スタイルを取っている。とは言うものの，その運営スタイルは各年度ごとに異なっており未だ試行錯誤の段階である。また基本的には運営スタイルもその年度の学生たちと話し合いながら決定している。

平成25年度は，２年生のゼミの中でいくつかのプロジェクトを立ち上げた。その各プロジェクトのリーダーを中心に研究や実践を行い，毎週のゼミでその経過報告，それに伴うフィードバックを行うというスタイルを取った。プロジェクトごとに完結を目指すこのスタイルは企業で言えば事業部制組織のようなものである。このスタイルは各プロジェクトが自身の研究，実践活動に専念できるというメリットがあった一方で，他のプロジェクトに関する関心が損なわれるという問題があった。このことから人手が必要となるプロジェクトのイベントに他のプロジェクトからの参加者が得にくく，思った活動ができないという事態が何度かあった。また，そういったことにより多様な学習機会が失われてしまった。

そうした反省も踏まえ平成26年度には，１年生，２年生を混在させた状態で「企画」,「経理」,「広報」,「総務」の４つの職能に分ける職能別組織のスタイルを取った。１年生と２年生のゼミは異なる時間帯に設定されているため，同時に行うことはできない。従って，授業の空き時間などを用いて各部門が運営会議を開催し，その結果と活動内容を週次で筆者に報告する形となった。職能別組織に分けることによって一人が様々な活動に参加することになり多様な経験や勉強ができるようになったというメリットがあった一方で，企画部門に仕事が集中してしまう問題点が発生した。また，平成26年度は１年生，２年生を混在させた状態で地域活性化の活動を行ったのだが，１年生と２年生では学習してきた内容と経験に差があり，１年生が２年生についていくことが難しいという印象を受けた。こうした問題点については今後も実践を行う主体である学生と話し合いながら試行錯誤を繰り返していくこととなろう。

3-4．平成26年度の主な活動

⑴　商店街での活動：学生カフェaRisu

学生カフェaRisuを出店する契機となったのは滝川市商業観光課が企画した「若者連携商店街魅力アップ事業」である。これは地域の将来を担う若者（高校生・大学生等）が連携し，新たな発想のもと商店街の魅力向上を目指すことを目的とした事業である。当初，具体的な実施内容は決定していない状態であったが，高校生・大学生の視点から商店街の現状を分析し，商業者とともにソフト事業を展開し，商店街の魅力向上に繋げるという方向性は決定していた。そこで，商業観光課の職員と協議を行った結果，前年度にゼミ生が開発してい

たホワイトドッグを提供するカフェを出店することとした。それが学生カフェaRisuである。具体的には商店街と滝川市の商業観光課との共同事業である「奇想店街」というイベントに参加するという形での出店となった。常時運営されるわけでは無く，イベントなどに合わせて出店する一日限定のカフェである。出店場所としたのが駅前商店街の理事が経営しているカフェである。一般的には空き店舗を用いるケースが多いが，ここは日常的にカフェを運営しているのでキッチンスペックが十分であることと食器類などが揃っていること，及び内装も素晴らしくあらゆる条件が揃っているというメリットがある。

最初の出店は 6 月であった。提供した商品はホワイトドッグ，学生の手作りケーキである。facebookページのkjc國學院短大生応援ページをメインに広報を展開したが，奇想店街では開催の度に新聞に折込チラシを入れており，チラシに学生カフェaRisuも掲載して頂いた。また，地元紙 2 紙も記事で取り上げてくれたこともあり，予想以上の集客をすることができた。ゼミとしても初めてのカフェの出店であり不安な面も多かったが，ご来店頂いた地域住民の皆様にも喜んでいただくことができた。ただし，課題も残った。それは初めてだったこともあり，カフェのオペレーションが上手くいかず，提供遅れなどが発生してしまったことや最悪のケースでは商品の未提供というケースもあった。また，オペレーションの準備ばかりに気が向いてしまい，客数をカウントする仕組みや今後の改善のために行うべきであったアンケートなどを取り忘れるなど初歩的なミスもあった。こういった問題こそあったものの一日限定のカフェを開くことができたことはゼミ生たちの自信につながった。

二度目の出店は11月 1 日であった。二回目の出店ではハロウィーンの時期だったこともあり，ハロウィーン風の楽しさをコンセプトにした学生カフェaRisuとなった。提供した商品はホワイトドッグに加え，地元滝川，江部乙の農家から仕入れたかぼちゃを使用したケーキ

図 7　第 1 回目の学生カフェaRisu

図 8　第 2 回目の学生カフェaRisu
（ハロウィーンコンセプト）

とスープ，学生の手作りオムライス等である。広報はfacebookページと奇想店街のチラシで行った。二回目の出店は初回の反省を踏まえ，オペレーションの改善，売上データや顧客数などを正確にカウントするための仕組み作り，アンケートやヒアリングの実施などを行った。また，ゼミだけで行うのではなく，学内のいくつかの団体とのコラボレーションも実現した。本学の幼児児童教育学科の幼児保育コースの授業で作成した，押し花を用いたアクセサリーの販売，劇団サークル「よいち」の協力も得た。また，当日内装として使った各種の飾りは本学の幼児保育コースの学生が授業で作成したものをお借りした。こうした協力により本ゼミだけでは提供できない魅力を高めることに成功したと評価している。そうしたこともあり，４時間の営業時間で95名のお客様にご来店いただくことができた。

⑵　江部乙での活動：駅舎清掃

平成26年度においても江部乙での主な活動は駅舎の清掃である。駅舎清掃が始まった経緯などは先に述べたが今年度も江部乙まちづくりコミュニティ行動隊の協力を得ながら現在まで続いている。駅舎清掃の最大の目的は清掃に集まってくる住民とのコミュニケーションを通じて江部乙地域のまちづくりに関心を持つコミュニティを作り出すことにある。そのため，清掃が終了した後には必ずお茶を飲みながらの情報交換会を実施し，コミュニケーションを図るようにしている。そのようなことを繰り返していく中で参加してくれる人数が増えてきた。駅の近隣に住んでいる住民の方が数名と本学の国文学科の教員と学生である。活動を継続することによって広がりが生まれ，コミュニティづくりという目標に近づいていることを実感している。

コミュニティづくりの観点からはまた一つ新しい動きがあった。それは江部乙地域の子供たちとの交流である。地域活性化やまちづくりを長期的な視点で見た場合には子供たちは重要な役割を果たす。それは進学などで一度江部乙を離れた子供たちに戻ってきたいと思ってもらえない限り，地域の人口は減少し，高齢化が進んでしまうからである。本ゼミでは児童館に通う児童との交流を進めてきた。10月の駅の看板塗り替えの際には塗り絵という形で色のデザインを作ってもらった。11月の駅舎清掃終了後には駅舎で豚汁をふるまい，体を使った遊びのワークショップ，トランプなどのゲームで交流を深めた。12月には江部乙地域の子供たちと一緒にクリスマスイベントを行う予定である。こうした子供たちとの交流は今後も継続していくつもりであるが，更に進めて子供たちの両親とも交流を深めていきたいと考えている。

また，11月には江部乙まちづくりコミュニティ行動隊主催の「無人４駅交流会」が実施された。このイベントは江部乙駅の近隣にある４つの無人駅（江部乙駅，東滝川駅，納内駅，

図９　江部乙駅舎清掃

図10　江部乙駅舎での子供たちとの交流会

妹背牛駅）でまちづくり活動をしている住民たちの情報交換会である。ここでは近隣の無人駅で精力的に活動している住民たちと交流を深めることができた。これらのように江部乙地域，それから近隣の地域の住民との交流を深めていくことで自ずと新しいコミュニティが生まれるのではないかと期待している。

駅舎清掃以外の活動としては，長く江部乙地域のまちづくりに取り組んできた実績のある江部乙丘陵地ファンクラブが実施しているフットパスへの参加である。フットパスとは，イギリスを発祥とする〝森林や田園地帯，古い街並みなど地域に昔からあるありのままの風景を楽しみながら歩くこと【Foot】ができる小径（こみち）【Path】〟のこと[6]であり，江部乙のフットパスコースは道内でも高い評価を受けているフットパスコースの一つである。江部乙地域には非常に優れた自然景観があり，それは観光資源として非常に魅力がある。参加した学生からもまた行きたいという感想が聞かれた。また，一年生のゼミでは自主的にエコツアーなどを研究している学生たちがおり，フットパスはゼミ生の中でも関心の高いものとなっている。フットパスへの学生の参加が地域資源の発掘や魅力の発信などに繋がっていく可能性があると考えている

４．おわりに

ここまで本ゼミで行ってきた地域活性化の活動について詳細に述べてきた。ここでは，⑴地域活性化の活動に対して掲げている目標に対するものと⑵実際の活動レベルにおける成果と課題を整理する。

⑴　地域活性化の活動に対して掲げている目標に対して

先述したように，本ゼミでは地域活性化の活動を始めるにあたって⑴実践的な経済学・経

営学の教育方法の開発，(2)学生参加型地域活性化モデルの創出，(3)大学の地域貢献という 3 つの目標を掲げている。これらの観点からみた成果としては，

① (1)に関して，実践の課程で生じる様々な問題に対して自ら解決策を考えて実行する力がついてきていると感じている。特にメンバー間におけるモチベーションの違いに対処するために学生自らが様々なツールを開発し解決しようと図った。また，イベントに関しても当初は筆者が指示することが多かったが，最近ではほとんどの内容を学生たちで決定するようになってきた。

② (2)についてはまだ学生参加のまちづくりの経験が浅く，モデルの開発までは至っていない。もっと長期的に試行錯誤する中で形にしていきたい。

③ (3)大学の地域貢献という意味では成果が表れ始めている。今年度になって様々なイベントに本ゼミが誘われるようになったのだが，これは地域活性化やまちづくりのステークホルダーの一人として認め始められていることを意味していると思われる。また，学生が市の広報や地元紙に取り上げられるケースもあった。

一方課題として，

① (1)に関しては，座学で勉強する内容と地域活性化活動で学ぶ内容が上手にかみ合っていない印象を受けている。地域活性化の活動に合わせて座学の内容を決定すると焦点が狭くなりすぎる。とはいえ，様々なニーズを持つ学生の座学に合わせた地域活性化活動となると活動の領域が狭くなってしまう。学生側も将来的に専攻する分野が決まっていないケースが多いこともあり，地域活性化の活動内に応じて様々な研究分野を紹介し，各メンバーの興味に合わせて研究を進めるスタイルも試してみたい。

② (2)に関しては，各活動の引き継ぎなどの継続性が課題となる。ある学生が自らの興味をもとに始めた活動は下級生に引き継がれにくい。また，上級生のノウハウを下級生に伝えていくことも課題となる。特に短期大学では学生の入れ替わりも早く，年度が替わるたびにゼロからのスタートになってしまうケースも考えられる。引き継ぎのための報告書の作成など対策を講じる必要がある。

③ (3)に関して，地域ニーズを正確につかむことが課題となる。現行では学生のやりたいことをベースに活動内容が決定している。このやり方では地域ニーズとのミスマッチが起きる可能性がある。イベントなどの活動とともに，地域住民に対するアンケートやまち歩きなどを通して地域の課題や住民のニーズを調べる調査活動も必要となってくると思われる。また，地元滝川市を中心に中空知地域からの学生を増やし，活動への参加を促したい。というのも，現在本ゼミに所属している学生は市内および近隣地域の出身者が少ない

からである。地域の若者を本学で育て，地域で活躍するようにするのは大学の大きな社会貢献だと考えている。

⑵　実際の活動レベルにおける成果と課題

実際に活動していく中で生まれてきた成果として最も大きな成果は，地域活性化活動やまちづくりなどを積極的に行っている住民，行政など様々なステークホルダーとの関係が生まれてきたことである。筆者も学生と共に地域活性化の活動をしていく中で様々な住民の方と知り合う機会を得た。学生も普通に学生生活を送っている中では出会うことのできない住民の方との交流を楽しんでいる。最近では，学生を仲介して筆者が紹介を受けるようなケースも出てきた。学生の地域に溶け込んでいくスピードに驚くとともに，こうした学生の特性を活用し本学がもっと地域に貢献できるようにしいていきたい。

そのためにも活動を長期的に行っていくことが課題となる。あまり多くの活動を行うと学生の負担という問題が生じ，活動が継続できなくなってしまう。そのため，今後は学生に対する教育効果と地域活性化の効果という二面から活動内容を評価し，重要性の高いものを重点的に行っていくことも検討している。

（謝辞）

舛井ゼミとして地域活性化の活動をしていくにあたり数多くの住民，行政の方々の支援を頂いております。江部乙地域では江部乙まちづくり「コミュニティ行動隊」（会長：高谷富士雄様，旧江部乙まちづくり研究会）の皆様のお力添えによって駅舎の清掃も継続できています。また，同地区では渋谷商店様より，様々な物品をお借りしたり，場所を提供して頂いたりと多大なご協力を頂いております。学生が失礼を働いた際には愛情を込めてお叱り頂きました。その後の学生たちの地域へのまなざしや姿勢がとても良くなったと感じています。感謝申し上げたいと思います。

商店街地域では，鈴蘭商店街理事の高畑方雄様から店舗スペースの無料提供など並々ならぬご協力を頂いております。

また，行政では商業観光課の後呂様，平沼様には市内での活動においてかなり無理な調整などをして頂きました。こうした調整なしでは学生カフェは実現することはできませんでした。感謝申し上げたいと思います。また，お忙しい時に大量のホワイトドッグを作ってくださるBERG様にも感謝申し上げます。

その他市内外の多くの方々のお力添えの結果ここまで2年間の活動を行うことができました。この御恩は学生とともに地域を良いものにすることでお返しできればと思っておりま

す。今後ともお力添え頂くこともあろうかと存じますが，どうぞよろしくお願い申し上げます。

以上，記して感謝申し上げます。

［註］

1 『日本経済新聞』2014年９月13日朝刊
2 『日本経済新聞』2014年８月８日朝刊
3 北条［2013］，p.5
4 千田［2008］，p.87
5 紙袋ランターンフェスティバルとは，平成15年にスタートした滝川市の駅前で行われている市民参加型のアートイベントである。市民が作成した紙袋を用いたランターンにろうそくを入れて灯す。滝川市の冬の最も大きなイベントである。
6 日本フットパス協会ホームページ，2014年12月19日，http://www.japan-footpath.jp/aboutfootpath.html

【参考文献】

『日本経済新聞』2014年９月13日朝刊
『日本経済新聞』2014年８月８日朝刊
北条恪太郎「日本の大学が抱える根源的な問題を考える」『都市問題』vol.104，2013年，pp.4-15.
千田史郎「滝川市中心市街地活性化基本計画について」『新都市』vol.62，2008年，pp.87-92.

（参考資料）平成26年２月以降のゼミ活動（地域活性化関連）

日　付	活　　動	説　　明
２／１	地域報告会	ゼミの研究成果を市民向けに公開
２／８	江部乙駅舎清掃	
２／22	滝川紙袋ランターンフェスティバル	滝川市のアートイベント
３／８	江部乙駅舎清掃	
４／12	江部乙駅舎清掃	
４／25	紙袋ランターンフェスティバル報告会	アートイベントの報告会
５／10	江部乙駅舎清掃	
６／１	舛井ゼミの畑への苗植え	
６／14	学生カフェaRisu	一日限定の学生カフェ
６／20～22	ありす祭：滝川繋がろうプロジェクト	赤いリボンを持って写真を撮り，それを繋げ，つながりを表現するプロジェクト
６／27	滝川西高校での授業参加	新商品を開発してイベントで販売する授業への参加
６／27	滝川西高校「商業クラブ」と意見交換	部活動への助言
７／５～６	地域活性学会　第６回研究大会	全国大会へ学生と共に視察
７／24	まちの先生大集合！	札幌市立大学主催の新たな生涯学習の取組関連のワークショップ
７／26	シャッター街とは言わせない！	商店街でのイベントに出店
７／26	かやぎに祭り	江部乙での祭りにきゅうりの一本漬けの出店
８／９～11	ゼミ合宿	奈井江温泉にて
９／７	江部乙神社神輿担ぎ	江部乙神社の祭りに担ぎ手として参加
９／13	江部乙駅舎清掃	
10／11	江部乙駅舎清掃	
10／25	北海道どさんこパンチでの告知	北海道のまちづくりイベントでのゼミ活動告知
11／１	第２回　学生カフェaRisu	ハロウィーンコンセプト
11／８	江部乙駅舎清掃	
11／15	無人４駅交流会	江部乙近隣の無人駅にて活動している住民との交流
11／20	滝川農業士会とのワークショップ	市内の若手農家との意見交換
12／６	第２回「『田園都市』TAKIKAWAの20年後」にて活動報告	国際交流協会主催のイベントにて活動報告
12／12	滝川西高校「商業クラブ」との意見交換	新商品開発について助言
12／13	本学総合教養学科「研究発表会」にて活動報告	本ゼミの取り組み事例における「広報」と「組織」について報告
12／19	高大連携の授業へ学生参加	高校生が受講する模擬授業でゼミ生が学生参加のまちづくりを授業
１／31	地域報告会	研究や活動で協力いただいた地域の関係者に向けての成果報告会